

2011（平成23）年度 京都大学 入試問題 理系 第2問 解答例

問一

肉筆で書くことには、作家の手の動きを示す筆跡という表面的な身体性だけでなく、作家の表現努力そのものの痕跡という、より内面から生じる身体性が現れるということ。

- * 「表面的身体性」と（より深い）「作家の表現努力そのものあとかた」とをそれぞれ、解答で記したうえで、その本文中での意味を説明する。
- * 「表面的」な筆跡であれ、「もっと深い」ものであれ、いずれも「身体性・身体的なもの」であるから、「視覚的である／視覚的ではない」の違いではないので注意。

問二

書かれる言葉は、時間をかけて構成を繰り返し、完成後に提出されることを第一とするので、印刷によって完成前の跡を払拭するのが理想的であるが、原稿写真は書く工作の跡を明白に残し、書かれる言葉の理想と正反対であるから。

- * 理由説明の構文では最低限のこととして、傍線部の主題である「その（効果は逆）」という指示語の対象である「書く工作のあとをありありと示している原稿の写真版」については、正確に明記しておきたい。

問三

書かれる言葉は、時間をかけて構成を繰り返し、読者に黙読される完成された印刷物を目指して、全体的連関を思想で見通し、悪趣味で不快感を催す余計で、冗漫で、重複的な表現を除去する。この原始的な基礎工作だけでも、対話現場で即興的に未完成のまま話される言葉とは異なるということ。

- * 傍線部の「かかる何でもよいような浄化の仕事が、既に」という箇所の意味説明を正確に。「何でもよいような」の意、「仕事」の意、「既に」の意など、本文を精読して正確に置換しよう。
- * 最終段落の最終センテンス（出題者による結びである！）「演説口調の、調子づいた、～散文読者にとって我慢のならぬ悪趣味として不快感を催さしめる」の箇所も、解答内容として反映したい。